

# 上司小剣「森の家」「花道」の挿絵と装幀に関して——石井鶴三宛上司小剣書簡から——

荒井 真理 亜（関西大学東西学術研究所）

## 一、はじめに

石井鶴三の挿絵画家としての仕事を考える上で、看過できないのは上司小剣の著作の挿絵や装幀であろう。石井鶴三といえば、中里介山の「大菩薩峠」や吉川英治の「宮本武蔵」の挿絵が有名だが、石井鶴三が挿絵画家として広く世に知られるようになったのは、大正十（一九二二）年二月二十一日から同年七月九日まで「東京朝日新聞」に連載された、上司小剣の長篇小説「東京」（第一部愛欲篇にあたる）の挿絵によるのである。

上司小剣（本名・延貴、一八七四～一九四七）は、小説家。奈良で生まれた。家は代々神主であったが、上司小剣は、明治三十（一八九七）年、堺利彦の勧めで上京し、読売新聞社に入社した。社会部の記者から出発し、社会部長、文芸部長、編集局長などを歴任、大正九（一九二〇）年まで二十四年間勤めた。そこで、島村抱月や正宗白鳥、徳田秋声ら自然主義文学者を知る。また、堺利彦を通して幸徳秋水や白柳秀湖ら明治社会主義者と交流した。明治四十一（一九〇八）年、「神主」で文壇に登場し、大正三（一九一四）年、「鱧の皮」で文壇における作家的地位を確立した。その他の代表作に「木像」（明治43年）、「東京」四部作（大正10～昭和22年）、戯曲「U新聞年代記」（昭和8年）などがある。

日本近代文学館には上司小剣の御遺族が寄贈された資料が「上司小剣コレクション」として所蔵されていて、その中に上司小剣宛石井鶴三書簡がある。これらの書簡は、拙稿「上司小剣『東京』（四部作）の成立過程——上司小剣宛石井鶴三書簡の紹介——」（日本近代文学館紀要資料探索）第7号、平成24年3月20日発行）で、紹介させていただいた。そして今度は、信州大学蔵石井鶴三関連資料から石井鶴三宛上司小剣書簡が四十六通も発見された。上司小剣と石井鶴三の書簡は、上司小剣の著作の挿絵や装幀に関するものがほとんどで、これらの書簡を調査し研究することは、上司小剣の伝記研究において重要であるだけでなく、大正から昭和初期にかけての出版文化研究においても有意義なものであるに違いない。本稿では、上司小剣の「森の家」と「花道」の挿絵と装幀に関する書簡十通（石井鶴三宛上司小剣書簡8通、嶋中雄作宛上司小剣書簡1通、上司小剣宛三井玉輝書簡1通）を紹介しながら、石井鶴三と上司小剣がどのようにして小説家と挿絵画家の関係を築いていったのかを見ていきたい。

## 二、「森の家」の挿絵について

石井鶴三は、上司小剣との出会いについて、「挿画の思い出」〔日

本文学の歴史 月報<sup>⑫</sup>「昭和43年4月、角川書店」の中で、次のように回想している。

新聞連載の小説に毎日挿画を描いたのは、上司小剣氏のはじめの新聞小説『花道』<sup>②</sup>というのが時事新報に出た時であった。大正九年だったと思う。これよりさき「婦人公論」に上司氏の『森の中の家』<sup>③</sup>という小説が載った時、主筆の嶋中雄作氏のなかだちで挿画をかいたことがあり、その時の縁で上司氏に知られ愛されて、氏の小説に挿画をたのまれることになった。上司氏ははじめ挿画というものにあまり関心をもっていられなかったのが、私の挿画を見て、連載小説に挿画の占める位置の重要であることを知ったという。

上司小剣は、「婦人公論」に連載した「森の家」という小説に挿画を入れるため、当時「婦人公論」の主筆であった嶋中雄作に、石井鶴三を紹介された。この「森の家」の挿絵の仕事を通して、上司小剣は石井鶴三を知り、「連載小説に挿画の占める位置の重要であることを知った」という。

「森の家」は、「婦人公論」に大正八年六月一日(第4巻6号)から翌九年三月一日(第5巻3号)まで、計十五回連載された。石井鶴三の挿絵は、大正八年六月一日(第4巻6号)から同年十一月一日発行(第4巻11号)まで毎回一枚ずつ掲載されており、計六枚である。

この時の石井鶴三の仕事の様子を、上司小剣は「挿絵画家は作家の女房」(「読売新聞」大正10年3月13日発行)の中で、次のように述べている。

私が絵人の小説を書き始めたのは極く近頃のこと、初めは絵などはどうでもいゝと思つてゐたのが、一番初めに「婦人公論」に絵人の続き物を書いた時、同社から石井鶴三氏に挿画を頼んでくれて、唯原稿を見て絵を描くのだとばかり思つてゐたら、石井氏から会見を望まれて、作中に出る人物の性格だとか、作の奥にある思想、それから背景に用ひられる土地といふやうなことを詳しく聞かれ、その上石井氏は背景の場所を実地に行つた上、絵を描かれたので作者にとつては非常に満足な絵が出来た。(中略)それ以来私は小説の挿絵といふことに対する考へ方が大変に重くなつて、少し力を入れた絵入小説を書く時は必ず石井氏に挿絵をお頼みしてゐるが、同氏も常に快く引き受けて気持のいゝ絵を描いてくれる。

上司小剣が「小説の挿絵といふことに対する考へ方が大変に重く」なつたのには、挿絵の出来はもちろんだが、石井鶴三の仕事に対する姿勢に感銘を受けたこともあつたのではないだろうか。石井鶴三は挿絵を描くために、登場人物の性格や小説の主題を知ろうとし、作品の舞台を実際に訪ねようとしたのである。そのために、上司小剣に会見を求めたという。信州大学蔵石井鶴三関連資料には、嶋中雄作を仲立ちとして、上司小剣が石井鶴三との会見の日の変更を知らせたと思われる、①嶋中雄作宛上司小剣書簡がある。

①嶋中雄作宛上司小剣書簡(仮番号「書6—44」)

同じ葉書を速達でお宅の方へも出しました。

取急ぎ申し上げます。二十六日に御社へ

参上、石井氏にお目にかゝり挿絵の打

ちはせ致すべき申上げておきました

が急に都合起り二十七日午後一時

前後参上の事に御変更を願ひ

たいと存じます。少しおくれましたが

右よろしく石井氏へお伝言お詫下さ

いませんでせうか。二十七日には必ず参上致します。

速達郵便として出された、この葉書の宛先は、「本郷区西片町十番地 中央公論社／嶋中雄作様」、消印の日付は大正八年五月二十五日、午後九時から十時、地名は判読できない。差出人は、「東京、下目黒四二／上司小剣」である。葉書の表には、上司小剣によって「五月二十五日夕」と記されている。葉書は、一般的な通信局発行印刷局発行の「郵便はがき」を使用している。

①の書簡を見る限り、上司小剣と石井鶴三の会見は、大正八年五月二十七日に行なわれたようである。「森の家」の第一回は、大正八年六月一日発行の「婦人公論」に掲載された。この第四巻六号の「婦人公論」が奥付の発行年月日通り発売されたかは定かではないが、印刷や製本の時間も考えると、やはり石井鶴三はごく短時間で挿絵を描かなければならなかったようである。

上司小剣は「森の家」を連載と並行しながら執筆していたようで、その後は、連載一回分の原稿が出来上がると、石井鶴三に書簡で作品の内容を知らせ、画ぐみを指示していたようである。②石井鶴三宛上司小剣書簡は、大正八年八月一日発行の「婦人公論」（第4巻8号）に掲載された「森の家」の第三回の挿絵についての連絡である。

## ②石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「高1—28」）

先日は失礼いたしました。

画ぐみ、左に申し上げます。何卒よろしく

お願い申し上げます。

九月九日。（夜）左傍挿入 郊外の村社の祭礼。お神

楽殿を利用して、村芝居あり。舞台

も花道も不完全。旅役者の一座で

化物のやうな、十六夜清心を演ず。

十六夜と清心との行き逢つたとこ

ろをおかき下さると結構です。

神社の模様は必要がありますまいが

念の為に申し上げます。

藁ぶきの社殿 お神楽殿（コレハ枝屋根）

〔図〕

コノ辺村人の群集。

石井様

上司小剣

封筒の宛先は、「府下、田端二八二／石井鶴三様」、消印の日付は大正八年六月二十九日、午前九時から十時、地名は判読できない。封筒裏の差出人は、「東京、下目黒四二／上司小剣」である。封筒裏

には上司小剣によって「六月二十八日」と記されている。便箋は一枚で、「十ノ廿松屋製」の二〇×二〇字の原稿用紙を使用している。

②の書簡で、上司小剣は、情景の説明とともに、芝居の場面を具体的に指定し、また神社の図まで付している。

③ 石井鶴三宛上司小剣書簡は、大正八年十月一日発行の「婦人公論」(第4巻10号)に掲載された「森の家」の第五回の挿絵についての指示である。

③ 石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号「高1-27」)

毎号画がまことに結構で感謝して居ります。

石井様 上司

『森の家』十月号分画ぐみ

よろしく願ひ上げます。

「ここまで欄外」

屍の検死のところですが、嘸お書きに  
くいことゝ察します。

競馬場の傍らの窪地に、雑草が生えて、  
櫛の林に取りかこまれたところ、馬  
を葬った塚(木標の四角なのを立つ)の  
前に荒菰を掩ふた二十歳ぐらゐの

若い女の死骸を、警部と「村 左傍挿入」役場員と

肥えた医師、(年頃五十余、背広に黒の

山高を被り、折り鞆を持つ、顔円く、  
無髻)とが検死してゐます。菰を剥

ぎ、帯を解き、着物を脱がせ、襦袢を脱がせ、腰巻まで取つて、真の裸体にするところを「文章に 左傍挿入」描くのですが、画の方では風俗壊乱になりますから、ほどよく願ひます。時候は晩秋、櫛の葉は枯れ、地には落葉があります。

「ここから欄外」

先日は甲州からの御絵葉がき

有り難うござい

ました。

便箋のみで、封筒はない。便箋は一枚で、「十ノ廿松屋製」の二〇×二〇字の原稿用紙を使用している。③の書簡では、検死の場面に登場する人物の職種や年格好、検死の手順などを知らせている。

このように、石井鶴三の誠実で丁寧な仕事に込めるように、上司小剣も挿絵に描いてもらいたい場面の様子をかなり詳しく伝えていく。

③の書簡には「毎号画がまことに結構で感謝して居ります」とあるが、上司小剣が「森の家」の挿絵を通して石井鶴三の仕事ぶりにどれほど感心したか、上司小剣が「石井鶴三さんを語る」(「書窓」昭和10年12月18日発行、第2巻3号)の中で「初めてお目にかかったのは、もうかれこれ十五六年も前、私が『婦人公論』に『森の家』といふ長編を連載したときである。石井さんの芸術的良心と、息づまるやうな努力とに打たれて私の作品までが向上したやうな気がした」と述べていることから、その感動が窺える。

## 三、初出「花道」の挿絵について

次に、石井鶴三は、上司小剣の長篇小説「花道」の挿絵を担当している。「花道」は、大正九年四月五日から同年九月十一日まで「時事新報」の夕刊に、計一六〇回連載された。「花道」の前には、久米正雄の「不死鳥」（大正八年十一月一日～九年四月四日、計156回）が連載されており、竹久夢二が挿絵を担当していた。

石井鶴三による「花道」の挿絵は、大正九年四月十二日と同年七月十二日と同年七月二十四日以外は毎日掲載されており、計一五七点に及ぶ。石井鶴三の「上司小剣」心に残る寸語雙語（「朝日新聞」昭和42年12月19日発行）によると、上司小剣が「花道」の挿絵を描いてもらう画家として新聞社に石井鶴三を推薦したらしい。

上司小剣は、「花道」の連載が開始された大正九年四月五日、「花道」に就いて」という文章を「時事新報」に載せている。上司小剣は、その中で「毎回必ず蝶子が現はれて蝶子の姿のないところにはこの小説もないといふ書きかたでありますから、挿画の方の目先きが変わらないで、石井君がお骨折りだと思ひます」と述べ、小説だけでなく石井鶴三の挿絵についても宣伝した。

では、上司小剣の「花道」の執筆と石井鶴三の挿絵の制作はどのような進められていったのであろうか。

④ 石井鶴三宛上司小剣書簡から、その様子が見えてくる。

④ 石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「高1—29」）

石井様

上司生

お手紙を大阪で拝見いたしました。

どうもお気の毒に存じます。実は七月

の雑誌の続きものをまだ一つも書いてな

いといふ始末で、とても書きためる訳

はまありませんが、別紙六十回までの絵ぐ

みを添へておきました。これで何んとかなり

ませんでせうか。只今時事社の方へ送りまし

た五十七回の原稿と合はせて、四回分「の ミセケチ」に 左傍挿入「改ページ」

なります。つまり六月二日の組み込みまで

ある筈で、六月一日に六十一回のお書き下

さればいゝ訳ですが、御旅行の余裕は出来

ないでせうか。

先頃五十回の原稿をあなたの方から社

へお送り下さつた後社で紛失してしま

つて、二度書き、予定の仕事に大狂ひを

生じました。

画はますく結構です。「不明三字 ミセケチ」何卒よろしく願ひます。

封筒の宛先は、「東京市外。田端二八二。／石井鶴三様」、消印の

日付は大正九年五月二十七日、午前十時から十一時、地名は「船場」

である。封筒裏の差出人は、「大阪市東区博労町一丁目 大八旅館／

上司小剣」である。封筒裏には上司小剣によって「五月二十七日」

と記されている。便箋は計二枚で、「東京社特製」の「上司用箋」を

使用している。

④の書簡で、上司小剣は「実は七月の雑誌の続きものをまだ一つも書いてないといふ始末で、とても書きためる訳にはまありませんが」と述べている。④の書簡を出した時点で「まだ一つも書いて」いなかったという「七月の雑誌の続きもの」は、雑誌「改造」に大正九年七月一日（第2巻7号）から同年十月一日（第2巻10号）まで連載された「石川五右衛門」だと思われる。

④の書簡から、「花道」は既に完成した原稿を新聞社に渡して連載が開始されたのではなく、「森の家」と同様に連載と並行して執筆されていたことがわかる。ただし、「森の家」は月刊の「婦人公論」に毎月発表されたが、「花道」は日刊新聞に連載され、挿絵も毎日掲載されたのである。「どうもお気の毒に存じます」というのは、上司小剣の執筆が思うように捗らなかったために、書き溜めた原稿がなくなつて、石井鶴三には短時間で挿絵を描いてもらわなければならなかつたからであろう。

上司小剣は苦肉の策として、「別紙六十回までの絵ぐみを添へて」、「時事社の方へ送りました五十七回原稿と合はせて、四回分」を石井鶴三に送つたのである。なお、現時点の信州大学蔵石井鶴三関連資料調査では、第五十八回から第六十回までの画ぐみを記した「別紙」は発見されていない。

「花道」の第五十七回は大正九年六月一日付、第六十回は六月四日付の「時事新報」に発表されている。この「四回分」は「六月二日の組み込みまでである筈」というので、第六十回の挿絵は「六月二日」までに新聞社に渡されていたと思われる。④の書簡は五月二十七日に出されたもので、石井鶴三は上司小剣の手紙を受け取つてから、まさに自転車操業で挿絵を制作しなければならなかつたようである。

この時、渡された「四回分」は、第五十七回原稿と五十八回から六十回までの画ぐみであるから、④の書簡で上司小剣が「六月一日に六十一回のお書き下さればいゝ」と記したのは、上司小剣の書き間違ではないだろうか。

また、「先頃五十回原稿をあなたの方から社へお送り下すつた後社で紛失してしまつて、二度書き、予定の仕事に大狂ひを生じました」という。上司小剣の原稿は、上司小剣からまず新聞社へ送られ、今度は挿絵のために新聞社から石井鶴三に渡され、挿絵が出来ると石井鶴三が出来上がった挿絵とともに新聞社へ送り返していたようである。一つ原稿が往復するため、新聞社で原稿を紛失するというようなトラブルも起こつてしまつたのであろう。

#### 四、単行本『花道』の挿絵と装幀について

単行本『花道』は、大正十年二月三十日（マ）に玄文社より刊行された。発行日は奥付の記述に従つたが、明らかに誤植と思われる。なお、印刷日は大正十年二月二十日となっている。発行所は「東京芝公園／振替東京一四一七七／玄文社」、発行者は「東京芝公園九号／三井玉輝」。印刷所は「英文通信印刷所」、製本所は「春日堂鈴木製本所」。変型B6判（縦17.5×横10.5cm）、紙装、六二四頁。定価二円五十銭。

単行本『花道』の挿絵と装幀も石井鶴三が手掛けた。装幀の図が四点、挿絵が三〇点ある。新聞連載時の挿絵を使ったと思われるものもあるが、単行本用にサイズを変えて、新たに描き直したものが多い。

⑤石井鶴三宛上司小剣書簡から、単行本『花道』の挿絵や装幀は、

出版社を介してではなく、上司小剣が直接石井鶴三に依頼したことがわかる。

⑤ 石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「書6—48」）

拝呈。

先日は失礼いたしました。

『花道』を近く玄文社から出

版いたしますに就いて、釘装其

の他の御依頼に近日同社員兄三

井玉輝氏がお伺ひいたす筈

ですから、何分よろしく御依

頼申し上げます。いづれ御目に

かゝりまして。

十月二十八日

上 司 生

石井様

封筒の宛先は、「府下、田端二八二ノ石井鶴三様」、消印の日付は大正九年十月二十七日、午後七時から八時、地名は「白金」である。封筒裏の差出人は、「東京、下目黒四二二ノ上司小剣」である。封筒裏には上司小剣によって「十月二十七日」と記されている。便箋は一枚で、「東京文房堂製」の二〇×二〇字の原稿用紙を使用している。玄文社は、大正五（一九一六）年に「御園白粉」で知られた化粧品メーカー伊東胡蝶園の二代目社長伊東栄が興した出版社である。主幹は結城礼一郎で、社員には岡村柿紅、鈴木泉三郎、長谷川巴之吉

らがいた。宮本百合子の『貧しき人々の群れ』（大正6年5月1日発行）をはじめ、薄田泣菫の『後の茶話』（大正7年4月28日発行）や『新茶話』（大正8年6月25日発行）などの単行本の他に、「新家庭」（大正5年3月〜同12年9月）や「新演芸」（大正5年3月〜14年4月）、「劇と評論〈第一次〉」（大正11年6月〜12年9月）などの月刊誌を発行していた。大正十二（一九二三）年の関東大震災から衰退し、大正十四（一九二五）年に廃業した。

石井鶴三は、単行本『花道』の装幀を承諾したようである。⑥石井鶴三宛上司小剣書簡は、その礼状である。

⑥ 石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「書6—43」）

お手紙有り難く拝見いたしました。時事新報にあなたの原画が五十枚ばかり残つて居りましたの「を 左傍挿入」貰つて来て玄文社へ渡しました。其中から、あなたの「特に 左傍挿入」お気に入つたのを抜いたとき、新たに三四枚おかきを願つて、挿画にしたいから

其のお願いにあがり、釘装の事も願ひすると申して居りましたが、何分まだ私の方の原稿の校訂が出来ないので、先月中に渡すと言つた原稿が今月十日

後でなければ渡せないのです。原稿を受け取つてから計算を立て釘装の方の予算も拵へるのでせうから、願ひに出るのは御旅行からお帰りになつて後と存じますが

「葉書の右上から下端にかけて」

何分よろしく願ひいたします。今からかゝつても年内の間には

んから新春の売り物にすると申して居りました

葉書の宛先は、「府下。田端二八二ノ石井鶴三様」、消印の日付は大正九年十一月七日、午後一時から二時、地名は「白金」である。差出人は、「東京、下目黒四二ノ上司小剣」である。葉書の表には、上司小剣によって「十一月七日」と記されている。葉書には、一般的な通信局発行印刷局発行の「郵便はがき」を使用している。

⑥の書簡によると、上司小剣は「時事新報にあなたの原画が五十枚ばかり残つて居りましたのを貰つて来て玄文社へ渡しました」という。玄文社としては、新聞連載時の挿絵を単行本にも用いたいと考えていたようである。

この単行本の挿絵をめぐって、上司小剣と石井鶴三の間で、というよりも石井鶴三と玄文社の間で、ちよつとしたトラブルがあったようである。そのトラブルについて、石井鶴三は上司小剣に抗議の手紙を出したようで、⑦石井鶴三宛上司小剣書簡は、それに対する上司小剣の詫状である。

### ⑦石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「書6—46」）

お手紙拝見、御立腹のだん、まことに恐れ入りました。三井氏「は 左傍挿入」あんな風な、どつちかと言へば実業家肌の人で、よく戯談を言ふ人です

すから、『取り上げきりで……』も半ば以上戯談のつもりであらうと、私は「不明三字 ミセケチ」あなたに左傍挿入」笑つていた

ゞくつもりであの葉がきを封入したのでした。し

かしく考へてみますと、まことにお心持ちをわるくさせる葉がきでしたから、あんなものをお目にかけてことを後悔して居ります。しかし

私はあなたのお力によつてあの本を世に出

すことを樂み、喜んで居りますので、あなたが

お心持ちをわるくして下さると、私もあの本

を出すことを一切止めようと思ひます。三井

氏の態度や言葉は「不明三字 ミセケチ」私からお詫びいたし

ますから、装幀其の他にも前からの計画通り「不明一字 ミセケチ」

お願いが出来ませんでせうか、あなたに総べて

をお心持ちよくやつて頂いてこそ、あの本を

出す意義がありますが、あなたを失ふと、

出しても詰まらないやうな気がします。どう

してもこのまゝではお願ひが出来ませんでしたら、「改ページ」

いづれまた他の本屋から出させることにして、

一時あれを取り戻した上、改めてお願ひした

いとも思ひますが（本屋をかへて）、あすこから

あなたのお骨折りで出ること世間へも発

表し、時事の方でも喜んでみてくれますから、

成るべくは、あのまゝあの本屋に前々通りや

らせたいとも考へます。お手数恐れ入りますが、

今一度御返事下さらば其の上で本の寸法を早

くきめるやうに言ふなり、又は「出版を ミセケチ」断るなり、いづ

れともきめます。三井氏はたゞあの本屋の事

務員で、本屋を代表してあんな失礼なこと



を申し上げたので「不明一字 ミセケチ」はないのですから、お心持ちを直して下さらば、私は何よりも嬉しいのでございます。今日にも参上お願ひする筈ですが、新年の仕事が忙しいのと、先日来田山徳田両氏五十年祝賀会の委員で働き、疲れ切つてみますので、手紙で失礼いたしました。

十一月二十四日

上司生

石井様

封筒の宛先は、「府下。田端二八二。／石井鶴三様」、消印の日付は大正九年十一月二十四日、午後四時から五時、地名は判読できない。封筒裏の差出人は、「東京、下目黒四一二／上司小剣」である。封筒裏には上司小剣によつて「十一月二十四日」と記されている。便箋は計二枚で、「東京文房堂製」の二〇×二〇字の原稿用紙を使用している。

⑦の書簡の末尾に、「今日にも参上お願ひする筈ですが、新年の仕事が忙しいのと、先日来田山徳田両氏五十年祝賀会の委員で働き、疲れ切つてみますので、手紙で失礼いたしました」とある。ここに出てくる田山花袋徳田秋声誕生五十年祝賀会は大正九年十一月二十三日に開催された。当日は午後零時半から有楽座で記念講演や音楽演奏などが行なわれ、夕方から築地「精養軒」で晚餐会が催された。上司小剣はこの祝賀会の委員を務めていた。なお、田山花袋徳田秋声誕生五十年を記念して『現代小説選集』（大正9年11月23日発行、新潮社）が出版された。上司小剣は同書に「紫の血」という作品を寄稿している。

⑦の書簡は「お手紙拝見、御立腹のたん、まことに恐れ入りました」という書き出しで始まる。石井鶴三の「お手紙」がいつ届いたのかはわからない。しかし、上司小剣は十一月二十三日に「田山徳田両氏五十年祝賀会の委員で働き、疲れ切つて」いたにもかかわらず、翌二十四日には石井鶴三への返事を書いたのである。⑦の書簡からは、石井鶴三の抗議に対し、上司小剣が慌てて手紙をしたためた様子が窺える。

石井鶴三の立腹の原因は「三井氏」の発言にあったようだ。「三井氏」というのは、⑤の書簡にも出てきた玄文社の三井玉輝である。上司小剣は「三井氏はあんな風な、どつちかと言へば実業家肌の人で、よく戯談を言ふ人ですから、『取り上げきりで……』も半ば以上戯談のつもりであらうと、私はあなたに笑っていたぐくつもりであの葉がきを封入したのでした」と弁解している。石井鶴三の気分を害した「葉がき」というのは、⑧石井鶴三宛上司小剣書簡に同封された、⑨上司小剣宛三井玉輝書簡だと思われる。

⑧石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「書6—47A」）

拝呈。もはや御旅行からお帰りに  
なりましたでせうか。

玄文社からかう申してまゐりました。お忙しいところを御迷惑とは存  
じますが、何卒よろしく、折り入つて  
御願ひ申し上げます。

十一月二十一日

上司生

石井様

封筒の宛先は、「府下。田端二八二。／石井鶴三様」、消印の日付は大正九年十一月二十一日、午後三時から四時、地名は「白金」である。封筒裏の差出人は、「東京、下目黒四二二／上司小剣」である。封筒裏には上司小剣によって「十一月二十一日」と記されている。便箋は一枚で、「東京文房堂製」の二〇×二〇字の原稿用紙を使用している。

上司小剣が「玄文社からかう申してまゐりました」というのは、次の⑨上司小剣宛三井玉輝書簡の内容を指す。

⑨上司小剣宛三井玉輝書簡（仮番号「書6—47B」）

拝復お手紙並びに

御玉稿正に落掌いた

し御礼申上候石井さんが

さしゑとり上げきりでごま

りをり候至急御尽力下さい

ますやうに御願申度候

葉書の宛先は、「下目黒／上司小剣様」、消印は判読できない。差

出人は、「新家庭 新演芸 東京芝公園 玄文社／振替口座東京

一四一七七番／電話芝六六九七・七二七五／三井玉輝」である。葉

書の表には、三井玉輝によって「大正9年11月20日」と記されてい

る。葉書には、一般的な通信局発行・印刷局発行の「郵便はがき」を使用している。

玄文社社員の三井玉輝は、石井鶴三の仕事に時間がかかっているので、上司小剣から石井鶴三に何とか催促してもらおうと、「石井さんがさしゑとり上げきりでごまりをり候」と訴えたのである。上司小剣は、出版を急いでいる玄文社の意向を石井鶴三に伝えるため、⑨の三井玉輝からの葉書を⑩の書簡に同封したのではなかったか。

⑥の書簡から、石井鶴三が単行本『花道』の挿絵と装幀の仕事を承諾したのは、大正九年十一月七日である。その後、上司小剣が玄文社に送った新聞連載時の挿絵の原画が、玄文社から石井鶴三のもとに渡ったはずである。⑨の三井玉輝の葉書は、大正九年十一月二十日に出されている。つまり、玄文社は、石井鶴三が挿絵の選出や制作を十日ほどで終えることを期待していたということになる。一点の挿絵を描くのに、丹念に取材し、实地に踏査し、決して手を抜かない石井鶴三である。単行本の『花道』の挿絵は三〇点ある。三〇点もの挿絵の選出や制作を十日ほどで仕上げるといえるのは、出版社側の計画に無理があったといえるだろう。

⑦の書簡で、上司小剣は「三井氏の態度や言葉は私からお詫びいたしますから、装幀其の他も前からの計画通りお願ひが出来ませんでせうか」と懇願している。その上司小剣の思いが通じてか、石井鶴三は単行本『花道』の挿絵と装幀の仕事を放棄しなかった。

しかし、その後も玄文社と石井鶴三の間のトラブルは続いたようである。⑩石井鶴三宛上司小剣書簡も、再び出版社の不幸際についての詫状である。

⑩石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「書6—45」）

校正をお眼にかけなかつたさうで、何んとも恐れ入れました。あすこはさういふことに堅いうちなんですけれど、何分にも急いだので、(新年の売り出しにする為の)手ちがひになつたのであらうと存じます。重々私からもお詫び申し上げます。しかし、本も画もまことによく出来て喜んで居ります。

あすこは製本を特に入念にいたしますので、余

計に手数がかゝるのです。本は二部差し上げたとして居りましたから、着いたでございませう。お礼はまだ

らうと思ひます。私の方から催促いたしませうか。(二十日)

葉書の宛先は、「府下。板橋町字中丸二八二ノ石井鶴三様」、消印の年月は判読できず、日は二十日、時間と地名も読み取れない。差出人は、「東京、下目黒四二二ノ上司小剣」である。葉書には、一般的な通信局発行印刷局発行の「郵便はがき」を使用している。

大正十年一月十三日、上司小剣は石井鶴三に宛てた賀状(仮番号「高1-26」)で、「目下『花道』の校正に忙殺されて居ります。二ヶ所の印刷屋でやつて早く出さうとしてゐるのですから、校正が大変です。小さくかいていたゝいた画の入れ場所がめちやくで困つて居ります(玄文社の方で入れちがへたのです)」と述べていた。上司小剣が「小さくかいていたゝいた画の入れ場所がめちやくで困つて居ります」というように、単行本『花道』の挿絵は、本文の場面と一致していない箇所に入らされているものが多い。この上司小剣の賀状によつて、石井鶴三は自分のところには校正が来なかつたことを知り、その旨を上司小剣に伝えたようだ。それで、上司小剣は⑩の書簡で「重々私からもお詫び申し上げます」と謝つたのであ

る。

また、⑩の書簡で上司小剣は、「お礼はまだらうと思ひます。私の方から催促いたしませうか」という提案もしている。単行本『花道』の刊行に際しては、著者である上司小剣が、玄文社と石井鶴三の間に立つて、本づくりを進めていたことがわかる。

## 五、おわりに

上司小剣は、⑦の書簡で「あなたに総べてをお心持ちよくやつて頂いてこそ、あの本(引用者注『花道』を指す)を出す意義がありますが、あなたを失ふと、出しても詰まらないやうな気がします」とまで述べていた。もちろん立腹している石井鶴三をなだめるための言葉であるが、上司小剣の本心でもあつたに違いない。上司小剣は「森の家」と「花道」の仕事を通じて、石井鶴三に対する信頼を深めていったのである。

そして、上司小剣は長篇小説「東京」の挿絵を石井鶴三に依頼する。その時のことを、石井鶴三は「上司小剣—心に残る寸語雙語」(前掲)の中で、次のように回想している。

その(引用者注・「花道」をさす)次は上司さんの代表的大作「東京」が朝日新聞に連載される時、上司さんから手紙をもらい「これは私の生涯の作品となるかも知れぬ大事な仕事だから、ぜひ挿絵をかいてもらいたい」とあつた。もち論ひきうけてさらに力を入れて挿絵にうちこんだ。

上司小剣は「東京」を「生涯の作品となるかも知れぬ大事な仕事」

と考えていた。だからこそ、その挿絵は石井鶴三に描いてもらいたかったのであろう。この時の石井鶴三宛上司小剣書簡、すなわち「東京」の挿絵の依頼状も、信州大学蔵石井鶴三関連資料から発見されている。

本稿では、信州大学蔵石井鶴三関連資料の石井鶴三宛上司小剣書簡四十六通のうち、「森の家」「花道」の挿絵と装幀に関する八通を紹介したが、今回取り上げなかった三十八通の中には、先の挿絵の依頼状をはじめ、「東京」四部作に関する書簡が多数ある。

これらの書簡の内容を明らかにすることで、上司小剣の「東京」の成立過程がより具体的に見えてくるはずである。また、石井鶴三の仕事の様子や当時の出版事情などを知る新たな材料も提示できると考えている。上司小剣を中心に、新聞雑誌の担当者や出版関係者のものなども視野に入れながら、今後も石井鶴三宛書簡の整理を続けていきたい。

## 注

- (1) 引用は『石井鶴三文集Ⅱ』（昭和53年7月28日発行、形象社）による。
- (2) 上司小剣の最初の新聞連載小説は、「読売新聞」に明治四十三年五月六日から七月二十六日まで連載された「木像」である。
- (3) 正しくは「森の家」。
- (4) 引用は『石井鶴三全集2』（昭和61年7月18日発行、形象社）による。

## 参考文献

- 『石井鶴三全集1』（昭和63年12月21日発行、形象社）  
 『石井鶴三全集2』（昭和61年7月18日発行、形象社）  
 『石井鶴三全集別巻1』（平成元年3月29日発行、形象社）  
 『定本花袋全集別巻』（平成7年9月23日発行、臨川書店）  
 『徳田秋声全集別巻』（平成18年7月20日発行、八木書店）  
 伊東栄 『伊東玄朴伝』（大正5年7月25日発行、玄文社）  
 伊東栄 『伊東栄伝』（大正6年2月25日発行、玄文社）  
 伊東栄 『父とその事業』（昭和9年7月31日発行、伊東胡蝶園）